

平成22年度 第1回道徳教育について考える会 協議概要

日時：平成22年7月6日
13:30～16:30

場所：備前県民局古京庁舎4階会議室

平成20年度に設置した「道徳教育について考える会」では、昨年度末に、それまでの協議の結果を「中間まとめ」として公表した。(県教育庁指導課ホームページ参照。)
「中間まとめ」については、教員研修会で活用するなどして周知を図っている。

今年度は、その「中間まとめ」に示す「目指す子ども像」について、求められる具体的な姿を検討している。第1回の会議では、次のことを検討した。特に、(1)を重点的に協議し、第3回の会議では、(2)を重点的に協議する。

なお、第2回の会議については、道徳教育実践研究事業の推進校において、授業参観及び協議を行う。

協議 「目指す子ども像」について

- | |
|---|
| <p>(1) 就学前で求められる具体的な姿</p> <ul style="list-style-type: none">・就学前段階で大切にすべきこと・小学校との接続を踏まえた取組 等 |
| <p>(2) 高等学校段階で求められる具体的な姿</p> <ul style="list-style-type: none">・高等学校段階で大切にすべきこと・中学校との接続を踏まえた取組 等 |

(1) 就学前で求められる具体的な姿

- ・ 幼稚園では、規範意識の芽生えを培う。「ルールを守っていないからいけない。」ではなく、「なぜ、守れなかったか」を考えさせたり、「ルールを守る方が遊びが楽しい」ことに気付かせる必要がある。また、園で子どもは、うさぎの死から、生命には終わりがあることに気付いた。動植物の世話を通じて、生命の大切さを感じさせることが大切である。自分のことで精一杯の時は、相手のことを思いやることができない。情緒の安定があつてこそ、自尊感情が育つ。友達との交流で、葛藤が生じ、「自分の考えとは異なる考え方もある」ということに気付く。そういう体験が大切である。
- ・ 自己肯定感、自己有用感、自己存在感をもてない子どもが増えていると感じる。また、核家族化や携帯電話の普及の影響もあるかも知れないが、コミュニケーション能力の低下もある。昔の家庭は、大家族が多く、赤ちゃんからお年寄りまで異世代の人間と関わることが自然であった。そうした環境の中で、自分の思うようにならないことなどを身をもって実体験し、相手を受け入れる素地が自然と身に付いていた。
しかし、現在の核家族では、そうした体験が乏しい子どもが多い。もっと地域との関わりを増やし、積極的に異世代間交流を行ってほしい。例えば、子どもたちが乳幼児検診に参加したり、老人施設を訪問して、直接他人の肌に触れ、ぬくもりを感じるなどの実体験をすることが重要である。道徳の授業だけでなく、理科や家庭科でもこうした実体験をさせることはできるのではないか。
- ・ 子どもの自尊心を育むため、参観日に親が我が子の良い点をメモする「参観メモ」や親同士がお互いに我が子の良いところを紹介し合う機会を設けるなどしている。家庭との連携では、PTA組織の中に保護者全員が参加する保護者の会やOB、OG会などがあり、いろいろな活動でサポートしてもらっている。
- ・ 職員の年齢構成は様々であるが、それぞれの世代で役割分担し、担任以外でも子どもに関わるようにしている。保育の質を高めるとともに、子どもの心が満たされるように信頼

関係づくりに努めている。

また、近年発達障害の子どもが増えており、専門機関と連携し対応している。

- ・ NPO活動支援センターは、地域のサポート等ができる団体の情報をもっており、外部からの依頼を待っているが、そのことは一般の方にあまり知られていない。NPOとの連携は、活動の足りないところを補う一つになりうると思う。
- ・ 人に対して思いやりの気持ちをもつことが重要と考える。この心が幼い頃育っていれば、将来何とかやっていける。
- ・ 受け入れる側からの思いとして、就学前に身に付けてほしいことの基本は生活習慣。スキル的に「できる、できない。」は別にして、やろうという姿勢が大切。親がその意識に乏しいことがある。当たり前前の生活体験をして入学してほしい。
- ・ 将来、落ち着いた中学校生活を送るために、就学前から、「じっと話を聞ける」「叱られても我慢できる」子どもを育てていただくようお願いしたい。しつけの三原則は①あいさつ ②素直な返事 ③立ち上がった時に椅子を机の中に入れる（脱いだ靴を揃える）ことである。
- ・ 特別支援学校の高等部卒業後、就職するにあたり、企業からは、「挨拶ができる。」「返事ができる。」等、当たり前前のことが求められている。また、就学前から、「良いことは良い。悪いことは悪い。」ということをきちんと認識させることが必要である。
- ・ 自然に触れさせることは、重要ではないか。親が子どもに干渉しすぎて、子どもが甘やかされている。教えることは繰り返し教え、子どもが考える時はじっくり待つことが大切である。
- ・ 国立青少年教育センターの調査研究では、子どもの頃の体験がその後の人生に大きく関わるという結果が出ている。自然体験が多く、友達や動物との関わりが多いほどやる気が高く、より深く学びたいという意欲も高い。また、社会のために役に立ちたいという意識も高い。
メディアの影響も指摘されており、テレビを見たり、ゲームをすることが多いほど、人との関わりが少なくなり、コミュニケーション能力が低下する。また語彙も貧弱になってくる。

(2) 高等学校段階で求められる具体的な姿

- ・ 自分に誇りをもてる自己肯定感、人の痛みが分かる思いやり、ねばり強く、挫けない心をもつことが求められると思う。具体的には、笑顔で、明るく挨拶ができたり、社会貢献としてボランティア活動を進んでできるなどが挙げられる。
家庭クラブと食物調理科と1年生がマドレーヌの配布をボランティアで行っており、独居老人宅を中心に600軒配って廻った。非常に喜んでもらい、生徒の自信になっている。
また、B級グルメフェスタのボランティアでは、クレームの対応などを通じて、生徒は良い経験が出来たと思っている。
- ・ 高校では、論理的思考力が身に付いてくる。社会の一員としての自覚も芽生えてくる。そうした中で、自分にはどのような特性があるのか考え、社会に出て使える実践力を身に付けていく。理論と実践により、生きていく力をつけることが高校での道徳につながる。高校には教科としての道徳はないが、どの教科、領域でも道徳教育に取り組めることを全教員が共通理解し、全校で取り組む体制をつくっている。
- ・ 高校生には、社会人としてどう自立するかを自ら選択できる人間になってもらいたい。また、挑戦する心をもって欲しい。失敗しても後悔するのではなく、次に繋がるよう反省すればよい。
- ・ 思いやりの心を育てることと豊かな人間形成が最大の教育内容である。
- ・ あいさつやお礼、礼儀など当たり前前のことを当たり前前にできるようになってほしい。また、見かけや肩書きに左右されない人を育成しなければならない。
さらに、高校生の社会貢献活動では、保幼小中との連携も踏まえて、実施できないだろうか。